

## 親の信条を子に伝える

“家”と言へば“夫婦”を考へるのは西欧的考へ方です。これに対して“親子”を考へるのが東洋的考へ方です。放牧といふ厳しい生活を基盤に発達した西欧思想では、個人の尊厳を唱ひ、親子でも別人格である事を強調しますが、恵まれた大自然の中で平和な農耕を営む生活の中では、個人を超えた“家”を重んずるのが自然で、これが東洋精神の基盤です。近代生活では、親子も法的に別人格として扱ひますが、精神的に別人格であってはならないのです。その事は、遺伝子学が“我”は両親の生命の延長であり、更には祖父母、曾祖父母に繋がってゐる事を教へてくれてゐるからです。

戦後の日本は、西欧の力に屈した為、「家を大切に作る心」を失ってしまひましたが、この“家”こそが真の“我”なのです。“世”といふ字は“十”を三つ合はせて作った字で、元来は“三十”といふ意味の字です。人は三十年で跡継ぎを得て世代を交替するのが普通なので、「人の世」を意味するやうになりました。木が年ごとに葉や花を替へながらその生命を保ってゐるやうに、人間は三十年ごとに世代を替へながら“家”といふ大きな生命を保ってゐるのです。個人は“小我”であり“家”は“大我”なのです。

これからの教育は、以上の認識の基盤の上に計画され、実践されなければならないのです。それも、子供たちにその認識を与へる前に、親たちが先づこの認識を有つ必要があります。今の親たちの「親には親の生活が有る」といふ、親の身勝手な考へ方を改めなければ、子供に正しい認識が出来る訳が無いのです。

「親の考へを子に押し付けてはならない」と言ふのは、強制の不可な事を言ふのですから、親の信条を子に伝える事は人の親としての使命であつて、これを否定するものではありません。人類は、父祖代々の生き方を受継ぎ、これに少しばかりの新しい体験を加へる事に因り、今日の偉大を成したのです。遠い先祖から受継ぎ蓄積して来た智慧を否定して何程の事が出来ませうか。直系の先祖は、三十代(一代三十年として九百年) <sup>さかのぼ</sup> 遡ただけでもその教は実に十億を超えます。この認識に立つ時、我が命の貴さ、我が子の教育の大切さが痛感され、自由放任に等しい今の教育の愚かさがよく解るでせう。